

城北中学の頃

山本 康

吾々の中学時代は、昭和十六年四月に始まり、昭和二十年六月末に終わる期間で、太平洋戦争の期間と殆ど重なっている。入学時に五年制の中学であった筈が一年短縮されて四年卒業になったこと、昭和二十年三月に卒業したのに、六月末までそれまでの勤労働員先で働いたこと(熟練度の評価か?)など、中学卒業後の上級学校生の徴兵制度の変革などを含めて、戦争による制度変革の影響をモロに受けた。

中学入学前年は東京オリンピック開催が数年前までは予定されていた昭和十五年。皇紀二千六百年に当たり、祝賀行事が全国的に繰り広げられ、軍需景気の所為か後で自分の職業になったビール販売量は戦前最高を示したとあり、敗戦時の惨めさとの相違は目を覆うばかりに激しい。

このため、開戦時の高揚期から、戦況不利の時を経て、食糧・物資欠乏に加え、激しい東京空襲を浴び、多数の学友が被災して犠牲者まで出して敗戦を迎える迄の期間に思春期を過ぎたのが中学時代であり、敗戦に向かつて栄養は欠乏し、心は荒び、思い出したくない思い出が多い。又、忘れようとしたためか、或いは歳で呆けたのか、覚えて居る筈のことと思いつけないこともある。

しかし、これも自ら生きて来た過程、幾つか思い出すままに述べるにととする。

入学の頃

隣家の男兄弟二人が東京府立四中に行って居り、しょっちゅう遊んで貰っていたためか、小学校の担任先生の奨めもあり、気楽に府立四中を受験したら見事落ちてしまった。

前年までの実績から、多くの生徒に合格すると太鼓判を押していた小学校の先生達は、青菜に塩だったと母が言って居たが、入試方針が変わり、内申書と体力試験を重視することになったためとか。懸垂を三回もやると腕が伸び切ってしまうヤワな筋肉では合格する筈もない訳。

幸い、城北中学校という私立中学が新たに出来、長年に亘り府立四中を育て上げた有名教育者が校長になるとかで、隣の小母さんのお奨めもあったか。受験したら今回は合格。

一緒に入学した中には同じような想いの者も多いに違いない。小学校での同期生も数人居り、府立四中と一緒に落ちた仲の良い友達も一緒に入ったのは心強かった。

入って見て驚いたのは、何とも小さな木造二階建てペンキ塗りの校舎で一階に教室が三部屋と十人も入れれば一杯になりそうな教員室だけ。二階は覚えて居ない。ソモソモこの校舎・校庭は小さな坂道を隔てた向こうに建っている上級学校受験界の名門城北補習学校のもので、そこらには五百人位は収容出来そうな校舎校庭が整い、鉄棒まで並んでいた。支那事変が拡大して徴兵制度が厳格になり、中学卒業浪人許容年数が減り、補習学校生徒が減り、空いた校舎を吾々が借りられたのかも知れない。

校庭といえど三組約百八十名の生徒が朝礼時に乾布摩擦をするために拡がると庭一杯になる有様。従って、休み時間にはキャッチボールも出さず、冬は、「馬乗り」と言ったか、二組に分かれ、一組が腰を折って長く繋がって造る馬に、他の組の者が次々と飛び乗る遊び位しか寒さを凌ぐ方法は無かった。

体操は鉄棒国体級の若い筋肉隆々の山口先生だったが、向いの補習学校の鉄棒を使った他は体操を覚えて居ない。

鞆は白色で、かけ方は府立四中と逆であったが、落ちた四中の生徒と同じ市ヶ谷の左内坂と一緒に毎日降りるのは精神的に愉快ではなかった。幸い、二年生から通学先が下赤塚に変わった。

朝礼は服装検査が厳しく、ズボンのポケットは総て縫って閉じてなければならず、上着のポケットには、通学時に電車内などで勉強する英単語帳や漢字帳等が入っていることが必須であり、ゲートルは登下校時に常に着用し、規定通りの装着（例えば、ゲートルの結び目はズボンの縫い目の線に合わせる）が要求された。

朝礼は先生も入って全員上半身裸になり、「ヨイショヨイ」の掛け声をかけながら行う乾布摩擦で終わる。数学の中島先生は亀の子だわしで皮膚を真っ赤にしながら、「エイシャー」と掛け声をかけるので、「エイシャー」が綽名になってしまった。先生と云えば、英語は寺井、通称テラカン、数学はエイシャーの中島、国語は石田、漢文はマタスケの村野、体操はバカスケの山口、日本史はウドンコの近藤、教練は中野などがレギュラーメンバーで、その他に授業がある時に現れる理科などの先生も居られたようだが、よく覚えて居ない。

先生達は、若い先生も又、後で加わられた先生を含めて総じて教えることに熱意を持って居られ、特にベテランは上級学校入試対策に精通され、叱り方も夫々特徴があり、その効果を計算されていたように思われる。

中学で初めて接した、英語・漢文・代数・幾何などは全くこれら中学の先生のお蔭で、山本実君に数年前に窘められたように、貶すだけでは

なく、深甚なる感謝を捧げなければならぬ。

毎週月曜日には、「月曜試験」と称して「英・数・国・漢」の試験が各週月曜日に一科目ずつ行われ、迅速に採点され、次の同科目の時間に厳しく論評が行われ、「こんなことでは、希望する高等学校や軍学校には入れないゾ！」で終わるのが常であった。

先生方の姿勢は、見事に上級学校受験を目指して統一されていた。吾吾、少なくとも私は見事洗脳されて行った。月曜試験は、その後卒業するまで、勤労働員期間中も週一回の登校日を使って、一回も休むことなく続けられたそうだ。

但し、例外が一回あった。一年生の十二月八日は月曜日で月曜試験の日。太平洋戦争の開戦は正にこの日。流石の城北でも、予定の漢文の試験が中止された。開戦と初戦の大戦果に胸を躍らせた日に起きた城北中学始まって以来の稀有な月曜試験中止を皆は覚えて居るだろうか。

校庭建設の整地作業

二年生になる頃、新入生の教室の確保のためか、吾々学年は市ヶ谷の仮校舎から下赤塚の小学校に仮住居を移すことになった。キャンパス予定地が変更になり校舎建設が遅れた為らしいが、新たな校舎建設予定地には、何回か整地作業に駆り出された。緩やかな起伏のある土地を一米程削って校庭予定地を整地する作業で、ゲートルを巻き、上半身裸で、鍬、スコップで削り、モッコで土を運ぶのだが、モッコでの運搬は初めてで要領が判らず大変重く肩に食い込み、痛くて苦勞した。

先生方も一緒に作業をされたが、近藤副校長が、底を抜いた二本の一升瓶を逆さにして、瓶口を長いゴム管で繋ぎ、夫々を鍬に結び付けて立て、水を満たして整地した地面の水平度の測定をされていたのは驚きであった。削らずに残った台地には肉桂の見事な大木が聳えていた。空腹の吾々はニツキと称して、表皮を剥がし、それを噛んで香を楽しんだことは言うまでもない。

この校庭となるエリアから斜面を数米下ると、小川が流れて居り、これを超えると再び平地が広がっていた。現在の運動場の辺りか。戦争で物資が欠乏し、食糧難に喘いでいたこの時期、当然、耕されて畑になり、サツマイモが植えられた。

手入れをした覚えもないが、よく晴れた日に収穫の時を迎え、夫々鍬やスコップなどを使って藪掘りに夢中になっていた。その時、地面にしゃがんで藪を手で掘り出していた私の頭に、突然鈍い音と共に強い衝撃を感じ、四肢に鋭い痺れが走った。頭に手をやると、戦闘帽の頂点が切

れ血がベツトリと着いて来た。私の存在に気が付いていなかった友達
の鎌が命中してしまったのだ。それから騒ぎ。練習をして来た筈の三角
巾を巻くのにヤケに時間がかかるやら、なんと代用品の竹製の担架に乗
せるのに、号令に合わせて四人で持ち上げたら竹材を結んでいた紐が切
れ、持ち上がっている筈の負傷者の私が地上に落ちているとか、いろい
ろあつて校門を出るまで一苦労。

紐を新たにした担架に乗せられてやっと着いた医者に切れた頭の皮を
縫つて貰つて帰宅した。傷の場所が頭と言うこともあり、直ちに専門医
に診てもらおうと、この儘では危ないとのこと託宣で、再び切開して縫い直
して呉れた。化膿した膿を排泄するために炎症が治るまで出口を開けて
おく必要があるとかで、全体を閉じたのは暫く経つてからであった。こ
のため、頭の包帯が中々取れず、諸掘り作業の監督役だった六中から来
られた堀江先生に随分心配をかけた。

お蔭で、その後何の支障もなく傘寿を超え、幸いであった。

首都空襲

太平洋戦争も終末期になるとB・29による東京爆撃の頻度が高くな
り連日、しかも昼間にも来襲することさえ希ではなくなった。

毎朝顔を合わせると、学友の何人かが、焼け出されたと言い、空襲で
やられない方が申訳ないような気になった。私は幸い焼け出されなかつ
たが、何回かは、自宅の防空壕の蓋を閉め、防空壕から柱・梁などが出
ないよう丹念に土で充分覆い、水をかけて逃げるところまでは行った。

或る日の午後、丁度登校日だったか、空襲警報が発令されて電車も動
かず、上板橋の学校から二、三人のクラスメートと歩いて東上線の線路
伝いに鉄橋なども渡り、池袋駅迄来た。すると、危険だからと駅外の防
空壕に避難させられた。上空を見ると、確かに危険で、整然と並んで飛
行するB・29に小さな日本の戦闘機が絡まるように、上下左右から攻
撃するが、B・29は平然と編隊を崩さず、却つて戦闘機が煙を出して
次々と墜落して行く。そのうち戦闘機の一機がB・29に重なつたよう
に見えた後、戦闘機はバラバラになり、B・29は尾翼付近から煙を出
し始めた。あちこちの防空壕から「万歳！」の声が上がった時、目の前
で大きな音がした。何かと見ると航空兵の半長靴で、〇〇少尉との白い
字が眼に飛び込んで来た。

翌朝の新聞一面にこの少尉の名前が出て軍神とあり、二階級特進とな
つていた。

その頃、勤労働員先の工場が爆撃にやられたためか、勤務先が軍需省に変わり、毎朝、新橋の元ダンスホールに出勤することになった。そこに来る青山学院のお兄さん達が運転する真新しく塗った青緑色の木製荷台に白ペンキで「軍需省」と大書したトラック（何と、木炭車ではなくガソリン車）の荷台に乗せられ、大通りを突っ走って空襲で焼けた被災地向かう。被災地では、残された焼け自動車からエンジンやデフなど、使えるものなら何でも取り外してトラックに積み込むのが吾々の仕事。この火事場泥棒的行為は、戦時中に合法化されたとか。青山学院のお兄さん達が乗っているトラックも、このように回収されたパーツを組み立てて再生されたものに違いない。

そんなある日、空襲で交通機関が麻痺し、阿佐ヶ谷の自宅から、新橋まで歩いて出勤した。途中、六本木辺りからは、焼け野原と化した視界を遮るものが無くなった広い斜面の向こうに皇居、お浜離宮、そして海が広がって見えた。

この日の作業目的地は、堀割や貯木池が多い江東方面で、移動途中に浮いている木材の上に点々と犠牲者の姿が見え、初体験に狼狽えたが、市民の犠牲はこんなものではなかった。

とある学校の角を曲がって息を飲んだ。広い校庭全体を覆う背丈以上の高さに積まれた無数の焼死犠牲者の山。その光景は今でも脳裡に焼き付いている。恐ろしいことに、その後は数多くの犠牲者と遭遇しても殆どショックを受けずに作業を進めることが出来、食事も抵抗なく喉を通った。

終わりに

その頃の私は、これでは日本は負けると思いながら、他方では、勝つまでは自分は戦うと考え、今、自らは死と隣り合って生きていると、不安無く思い、更に進学する高等学校で真善美を追及する日を夢に描く、と言う多くの矛盾を抱えながら、そう苦しまずに生きていた。

空襲に明け暮れる中で、佐藤健二郎君に新宿武蔵野館に連れて行って貰い、「格子無き牢獄」などを観たり、山本克郎君と日比谷公会堂に朴歯の下駄を履いて「第九」を聞きに行き、係員に注意されて跣になったことなどが懐かしく思い起される。